

Monthly Graphic Journal:vol.313



LEADER'S

巻頭特集

「ヘリテイジ・ツーリズム」が日本経済を変える

特別企画

再生日本

●企業家の軌跡と未来●The Intelligence●技●寺社散策●いい店 いい人 いい出会い

2015.4



表紙写真

『アサヒビール』、『エノテカ』を買収

『アサヒビール』の小路明善社長と『エノテカ』の広瀬恭久社長

「自分には必ずできると信じて

苦境を乗り越えてきました」



ラインプロテクト(株)

代表取締役

山口 信之

仁・義・礼・智・忠・
信・孝・悌

学業修了後は大手電力会社に就職した山口社長。そのままいけば将来は保証されていただろう。しかし30歳の時に退社を決め、裸一貫から『ラインプロテクト』を創業した。明確な根拠があったわけではないが「できるという自信があった」と社長は語る。同社の発端となった強い自信は、バブル景気崩壊と同時に訪れた混迷の時代にもブレることはなかった。過剰な自信は時に失敗をもたらすが、自信を喪失してしまっては成功はない。中庸の自信を持ち続けたことが成功へとつながったのだ。己を信じ、人を信じ、自らが定めた道を貫き通す——決して揺らがない信念があれば成功できるということを、社長の言葉から学び取れた。

(対談記事は66～67頁に掲載)

従業員主体の方針と幅広い事業展開で 新しいコミュニケーション文化の創造を目指す

内線工事や太陽光発電工事、電設資材レンタルにOA機器の販売・リースなど、幅広い業務を手掛ける『ラインプロテクト』。自社業務に取り組む傍らで、社会貢献活動にも積極的に取り組む同社を俳優の三ツ木清隆氏が訪問し、事業のさらなる発展を目指す山口社長にお話を伺った。

I N T E R V I E W

苦境を前にしても自信を失わず 従業員と共に難局を乗り切る

三ツ木 まずは、山口社長の歩みからお聞かせ下さい。

山口 茨城県笠間市の出身で、学業修了後は大手電力会社に就職し、30歳まで勤務しました。その中で自分で事業を手掛けてみたいという思いが高まり、1997年に当社を立ち上げたんです。独立してからもう18年になります。

三ツ木 独立にあたっては、不安や迷いはありませんでしたか。

山口 会社を辞める時は、「自分にはできる」と思っていましたし、両親も「自分の好きな道を歩めばいい」と背中を押してくれましたので、不安や逡巡はありませんでした。

三ツ木 独立後は、どういったお仕事を手掛けられたのでしょうか。

山口 勤務時代の経験を活かし、電気工事と電設資材のレンタルからスタートしました。その後は、新たにテレビの配線工事や電話回線工事といった通信事業に着手し、基盤を固めてきたんです。ちょうど通信業界に光回線が登場して反響を呼んでいた時期で、順調に売上げを伸ばしていきました。しかし、バブル崩壊を境に一気に仕事がなくなってしまって……。当時従業員は50名ぐらいの規模になっていたのですが、給料だけでなく外部業者の支払いもままならない大変な時期を経験しました。

三ツ木 そこで踏み留まれた要因は何だったのですか。

山口 不思議なことに、それだけの窮地に陥っても「自分にはできる」という自信を失わなかったんです。今は大変でも半年後、1年後は大丈夫だという確信もありましたからね。

三ツ木 どのようにして、苦境を乗り越えてられたのでしょうか。

山口 きっかけは、「自分が決めた道の上を従業員に辿らせるのではなく、従業員が進みたいと考え

る道と一緒に歩いてみよう」と思ったことなんです。つまり、自分の好きなように人を動かすのではなく、それぞれのやりたいこと、得意なことを伸ばしてあげようと。そのように発想を転換してからは新たにOA機器の販売とリースもはじめたんです。すると売上は急上昇し、そこから倍々で伸びていきました。OA機器自体の利益はそれほど多くありませんが、OA機器の売上げが上がると同時に他の事業も相乗効果で上がっていったんです。これは予想外でしたね。一時は食べるものにも苦勞した時期があったのに、よく盛り返してきたと思います。その後も小さなピンチは何度か経験しましたが、幸い大事には至らず、順調に歩んできました。



三ツ木 清隆

(俳優)

「仕事とは、私にとって通過点に過ぎない」とおっしゃる山口社長。「仕事が全て」ではなく、「生活の糧」でもなく、「通過点」という考え方がバイタリティ旺盛な社長ならではのお言葉だと感じましたね。そんな社長に今後ますますご活躍いただけるよう、陰ながらではありますが応援させていただきます！

ラインプロテクト 株式会社

【本社】茨城県水戸市見川町 2139-47 SSビル TEL 029-244-0250

【東日本営業所】茨城県水戸市見川町 2139-47 SSビル

【西日本営業所】大阪府大阪市北区東天満 1-6-8 ラシーヌ東天満 601

URL : <http://www.line-protect.co.jp>

若い世代のチャンスの幅を広げ 自社のさらなる発展を目指す

三ツ木 社長から従業員の皆さんに、どのようなことを話されていますか。

山口 皆によく言っているのは「夢を持ちなさい」ということですね。そして常に夢までの距離を測ったほうが良いと伝えています。

三ツ木 夢への距離を測る……ですか？

山口 たとえば、家から学校が近いのに遅刻する子どもは多く、逆に学校が遠いと遅刻する子どもは少ないと言われていきます。また、簡単に手に入るものであれば大切に扱いませんが、なかなか手に入らないものであれば、丁寧に扱いますよね。それと同じで、すぐに手が届くような目標ではなく、無理だと思えるぐらいの大きな夢を持つことが肝要だと伝えています。遠ければ遠いほど夢に対して真面目に向き合えるでしょうし、そうすれば叶えられる確率も高くなるだろうと考えているんです。

三ツ木 なるほど。社長ご自身もそうして夢を実現してこられたと？

山口 はい。私は現在48歳ですが、後5年ぐらいでこの会社を他の人間に託し

て、自分はまた違うことをしてみたいと思っているんです。

三ツ木 少し早いような気もしますが……。

山口 そんなことはありません。50代、60代を過ぎてしまうと「今の時代についていけないのでは」という危機感が高まりますからね。私は新しいもの好きで、いち早く新しいものを試してみたい、世間で流行りはじめたころには飽きてしまうんです。しかし、それでも最近では若い人に追いつけず、負けていると感じることがあるんです。ですから、私は若い従業員のやりたいことを尊重し、何事にも極力早く取り組んでもらいたいという思いが強いです。

三ツ木 社長は今後、どういった事業を手掛けていこうと考えておられるのですか。

山口 飲食業で海外展開できればと考えていて、出店や展開方法など、構想を練っている最中なんです。とは言え、飲食業の経験はありませんから、実現に至るまでにはそれなりの時間を要するでしょう。後何年かで創業20周年を迎えますから、まずはそれまでの実現を目標に、海外進出に向けて取り組んでいきたいですね。そのためにも、従業員がやりたいことに取り組める環境づくりに努めていき、自社をますます発展させていきたいと思っています。

(2015年1月取材)



代表取締役

山口 信之

学業修了後は大手電力会社に就職して30歳まで勤務し、1997年に独立して『ラインプロテクト』を立ち上げる。厳しい時期も経験するが、従業員主体の方針に転換したことで業績を伸ばすことに成功。現在は別事業での海外進出を模索している。



息子に見出した将来への夢と希望

▼何代にもわたって続く企業の経営者にしろ、一代で事業を築き上げた経営者にしろ、我が子同然の社の舵を血族に担ってもらいたいという気持ちは強いはずだ。ところが、後継について『ラインプロテクト』の山口社長に訪ねると、意外な答えが返ってきた。「私には10歳になる息子がおりますが、後を継いでほしいとは思いません。逆に、私が息子の夢に乗ってみたいと思っています」。息子には息子なりの人生を歩んでもらいたい——そんな親心が感じられる言葉だ。ちなみに、社長の息子は3歳からレーシングカートをはじめたそうで、全国各地で開催されるレースに

も参戦して優秀な成績を収めているという。「10歳になった今では海外の選手とも交流を持つようになり、それが私が海外に目を向けるきっかけになったんです」と社長。子息が将来F1レーサーとして世界を股に掛けて活躍するようになった時、スポンサーとしてサポートしたいという思いが、さらなる夢を生み出したのだろう。こんなにも大きな希望が目の前にあるのであれば、社長が子息による事業の後継よりも夢を支援したくなる気持ちもよく分かる。社長の息子が、鈴木亜久里や小林可夢偉のように、世界を舞台に活躍する未来が訪れることを願うばかりだ。